

「闇を破る声」9月13日放送

富山教区 呉北組 西光寺 中 哲陵

2009年8月、富山県は立山国際ホテルを会場にして、日本全国から浄土真宗にご縁のあった若い人たちが集まる催し、全国真宗青年の集いが「ひとりじゃない」をテーマに行われ、私もスタッフとして参加しました。この集いでは、参加者がいくつかのグループにわかれての話し合い法座や、ゲストとしてお迎えした高原兄さんのライブなどが企画されていましたが、もうひとつ、集い最初の大きなイベントとして、周囲を散策しながら、途中に設けられた中継点で出されるお題をこなす、ウォークラリーを通して交流を深めてもらおう、というものがありました。そのコースには、近くの山の上にゴンドラでのぼって、そこから尾根伝いに数百メートル離れた展望台まで戻ってくる、ところが含まれていまして、私も含めて何人かがコースの案内役として配置されました。

その日は午前中こそ日差しが差したものの、午後になりイベントが始まる頃には黒い雲が空を覆い、いつ雨が降るかわからない空模様となりました。そのため、ウォークラリーが予定通りスタートするかもわからないまま、私はもう一人のスタッフと所定の位置に待機しました。ところがいつまでも誰も通りません。ウォークラリーは中止になったのかななどともう一人のスタッフと話しているうちに、ぼつぼつと雨が降り出し、霧も立ち込めてきました。そのうち霧も濃くなってきて数メートル離れたスタッフの姿も見えなくなり、それでも誰かが来る気配もなく。小雨が降り、気温も下がり、濃い霧で周りの様子もわからずに、まだ来ないのか、中止になったのか、などと心もとなく思うこと、10分、20分くらい、ありましたでしょうか。

やがて、霧の向こうから人のさざめく声が聞こえてきて、まもなく、霧の中に参加された皆さんの姿がぼんやりと浮かび、「ご苦労様です」などの声をかけながら、私の前を通り過ぎ、また白い霧の中に消えていきました。ここに至ってようやく私は、イベントが予定通りに進行していたことを知り、張りつめていた気持ちが緩んだことでした。

このウォークラリー中にはイベントのテーマ「ひとりじゃない」にちなんで一句詠むというものがあり、集まった句からいくつか選び、高原兄さんが事前にご提供されていた曲の歌詞として、最後にみんなで歌うということになっていました。その中の一句が、聞いたその瞬間から私の中にすんとおさまりました。その一句というのが「一面の 白い闇にも 人の声」というものでした。「白い闇」という表現の面白さもありますが、何よりも、この一句が山の上での私の経験にじっくりきたものであったから。そして、日頃聞かせていただいているほとけさまの教えに通じるものがあると感じたからです。

私たちが日頃よくお勤めするお経の中に、重誓偈があります。偈というのは「うた」を意味する言葉で、重誓偈というのは重ねて誓ううた、ということです。浄土真宗では『仏説無量寿経』というお経が一番のよりどころとします。阿彌陀さまが、お師匠である世自在王仏のもと、法蔵菩薩というお名前でお修行されていた時に誓われた、四十八願、阿彌陀さまが阿彌陀さまたるゆえん＝ご本願を説くためです。この四十八願をお誓いになられた法蔵菩薩がその直後に、重ねて誓いをのべられたうたが重誓偈です。重誓偈では、四十八の誓いを更に三つに凝縮してうたわれています。一つ目にまず法蔵菩薩ご自身の成仏が、二つ目には苦しみの中にあるあらゆる命をすくいたいという成仏を目指す理由と、そのためのつきることない命の成就が。そして三つ目には、どのようにしてすくいをなすか、その手立てとして、ご自身のお名前を呼ぶ声、お念仏の声を世界の隅々に隈なく届け、響かせたいという、お名号の成就が誓われています。

そして、この誓いが成就された証が阿彌陀仏というお名前です。阿彌陀というお名前は、昔のインドの言葉で、無量の命を意味するアミターユス、そして無量の光を意味するアミターバ、その音のままを漢字に表したものです。先に述べました重誓偈の三つの誓いの二つ目、尽きることない命は無量の命＝アミターユスという、そして三つ目の世界の隅々に隈なく響き渡る声は、世界の隅々に隈なく照らす無量の光＝アミターバ、としてお名前の内に成就されていると、私は味わっています。

声を光とするのは、声には光と同様に、闇を貫く、切り開く、そのようなはたらきがあると思うからです。ほとけさまの声は具体的にお経の形となって伝えられてきました。そのお経を通して私たちのまことの姿、ありのままの偽らざる姿が照らし出されます。ほとけさまの教えに照らし出される私たちの有り様とは、「ひとりじゃない」ということです。私たちはいろいろな縁、かかわりの内に生かされているのです。にもかかわらず、自分の都合、欲望、煩惱に振り回されて、自分を中心にしてものごとをとらえがちで、そのために、さまざまな苦悩を離れられないでいるのが現実ではないでしょうか。

たしかに、生老病死というまさしくこの命の問題は、他の誰かに代わってもらうことのできない、私たちひとりひとりが背負っていかなければならないものです。そのために、我が身の孤独を感じたり、自分本位のものを見方をしてしまうこともあるでしょう。ですが、そのような私たちに、いついかなるときも、どこにいても、決して見捨てず常に見守り、私の命を共に生きる、そう誓ってくださるほとけさまが阿彌陀さまです。そして、私のこの口からこぼれてくださるお念仏、南無(なむ)阿彌陀仏(あみだぶつ)は、阿彌陀さまが今まさに私の上にはたらいてくださっている、そのあらわれなのです。私の命が決して私だけのものではなく、また決して孤独なものでもない、

そのことに気付いてください、というのがほとけさまの願いであり、私たちに向かって呼びかけてくださる声なのだと、山の上、雨が降り濃い霧が立ち込める、そんな中で生れた一句から、私はそのことに気付かせていただきました。
本日は尊いご縁をいただきました。ありがとうございました。

※重誓偈について補足

『仏説無量寿経』中にうたわれた偈文^{げもん}=うた

阿弥陀仏の本願=四十八願の直後に重ねて三つの誓いを誓うことから、「三誓偈」ともよぶ

① 我建超世願 必至無上道 斯願不満足 誓不成正覚

—われ超世の願を建つ、かならず無上道に至らん。この願満足せずは、誓ひて正覚を成らじ。

=わたしは世に超えすぐれた願をたてた。必ずこの上ないさとりを得よう。

この願を果しとげないようなら、誓って仏にはならない。

② 我於無量劫 不為大施主 普濟諸貧苦 誓不成正覚

—われ無量劫において、大施主となりて、あまねくもろもろの貧苦を濟はずは、誓ひて正覚を成らじ。

=わたしは限りなくいつまでも、大いなる恵みの主となり、

力もなく苦しんでいるものをひろく救うことができないようなら、誓って仏にはならない。

③ 我至成仏道 名声超十方 究竟靡所聞 誓不成正覚

—われ仏道を成るに至りて、名声十方に超えん。究竟して聞ゆるどころなくは、誓ひて正覚を成らじ。

=わたしが仏のさとりを得たとき、その名はすべての世界に超えすぐれ、

そのすみずみにまで届かないようなら、誓って仏にはならない。

(以上、それぞれ浄土真宗聖典の原典版、注釈版、現代語版より)

以下は筆者のとらえ方

1つ目の誓いは、法蔵菩薩ご自身の成仏を誓う

2つ目の誓いは、成仏の目的と、そのための無量の命の成就を誓う

3つ目の誓いは、目的を果たす手立てとしての名号=南無阿弥陀仏の成就と、

その回施(えせ)(=世界に広く行き渡らせること)を誓う